新たな高知県史【近代編】の編集について

R6.7 高知県史編さん近代部会
高知県史編さん事務局

第1 課題と目指す方向性（編集の前提）

1 前回県史近代編（通史）の項目と課題

○ 前回の県史近代編は、「政治史」の流れを中心とし、断片的に「経済史」「社会史」に分類される項目を折り込み、編年体に近い形式が採用されていた。

（後掲『高知県史』近代編目次(1970年刊行)を参照）

【政治】

- 県政の成立
- 自由民権運動
- 日清日露戦争
- 大正期の政治

【経済】

- 昭和初期の政治
- 昭和の戦争
- 明治大正の経済
- 戦時経済

【社会】

- 明治の社会
- 大正の社会
- 昭和初期の社会

○ 課題

（1）分野や地域に偏在があった

- ・ 政治史中心で経済史、社会史、文化史が薄かった。
- ・ 県下を網羅する発想に欠けており、地域社会の実情が反映されていなかった。
- ・ 農林水産業や鉱工業の扱いが小さかった。

（2）新たな歴史的課題への対応。

（3）高知の特色ある歴史的事象が十分に反映されていなかった。

2 新たな県史の目指す方向性

（1）分野や地域の偏在の解消

<分野> 新たな資料の発掘

- ・ 役場資料・公民館資料
- ・ 県内企業や経済団体が保管してきた資料
- ・ 農林水産業関連資料
- ・ 学校資料・社会教育関係資料
- ・ 宗教関連資料
- ・ 兵事資料
- ・ 文化団体資料
- ・ 衛生・救恤資料
- ・ 移民関係資料

<地域> 地域の偏在がない調査

- ・ 全市町村の悉皆的調査

(2) 新たな歴史的課題の反映

- ・環境
- ・人権
- ・国際交流

(3) 高知の特色ある視点の反映

- ・「災害・防災」… 風水害、地震・津波
- ・「民権と反民権」
- ・「宗教」… 四国遍路、廃仏毀釈、教派神道
- ・「部落問題」… 改善融和運動と解放運動
- ・「社会運動」… 労働運動、農民運動、社会主義運動
- ・「藩主家と家老家」… 政治的関わり、経済的関わり、文化的関わり
- ・「修史事業」… 土佐図書倶楽部、土佐史談会
- ・「地域の近代」… 幡多、安芸、嶺北、高吾北

3 新たな県史の目指す姿と進捗管理

- 悉皆的、重層的な資料調査の成果を踏まえ、そこから導き出される歴史的課題を丹念に拾い出し、県民が郷土への愛着を深めることにつながる新たな高知県の歴史の提示を目指す。
- 刊行までのスケジュールは、当面は「資料編」の刊行が中心となるため、編集開始までに採録される資料調査に目処をつけ、編さん計画に基づき3年間の編集期間へ経て各「資料編」を発刊する。
- スケジュールは、専門部会での作業確認や編集委員会への報告、事務局による作業の個別管理などにより、進捗に遅れが生じないよう適切に管理していく。

第2 編集の基本的な方針

- (1) 近代編が対象とする時代は、原則として高知県の発足(明治4(1871)年)から第2次世界大戦における敗戦(昭和20(1945)年)までとし、県民が本県近代社会の形成とその推移、その特色について理解を深められるように配慮する。
- (2) 丹念な調査を心掛け、政治、経済、社会、文化の各分野から幅広く資料を収集し、掲載項目のバランスにも配慮して、高知県の近代社会の推移が県民によりよく理解されるような編集を目指す。
- (3) 注目の集まる土佐の自由民権運動については、反民権派の活動にも配慮す

るとともに、幕末維新期からの流れや後世への影響にも注目し、一定の紙面を割いてその特色が十分理解される内容を目指す。

- (4) 自由民権運動とともに関心の高い維新期の扱いについては、近世部会と合同で特に「維新班」という作業部会を設けて、時代を多角的に描く。
- (5) 悉皆的な調査により、新たな歴史資料の発掘に努める。また高知県の歴史に関する最新の研究成果を反映させ、これからの研究者や、高知県の近代史に関心を持つ人々に研究材料を提供できる近代資料編及び本編を目指す。
- (6) 歴史資料調査や編集の過程では、できるだけ多くの県民や団体に参画してもらい、今後の本県の歴史調査・研究を担える人材の育成を重視した編さんを行う。

っているように思われる。したがって、本書も大体においてその時序をたどったが、この三期を通ずる大きな流れを把握するために、序章を設け「近代日本の展望」を試みた。さらに教育・社会・文化等の部門をそれぞれ三期に配分することを考えたが、この方法はそれらの流れを分断して、かえって関連を薄めるばかりでなく、問題によっては混乱させることをおそれて、第十三章「文化と社会」にまとめることにした。

一 事件に應じて、しばしば新聞の「社説」を引用した。事件に対する時代感覚を表現したものであり、世論を代表するものと考えたからである。保存されている新聞がほとんど「土陽新聞」であって、これに對抗した「高知新聞」の保存されたものがとほしいので、時には論説の偏向するものがないこともあるまい。したがって本書所掲の新聞社説に対しては別の角度からも批判的な世論があったことも考慮せねばならないのである。

一 戦災による官公庁文書や、新聞紙そのほか民間記録・文献の焼失によって調査に不如意のことも多かった。そのために本委員会は県内・県外にわたって史料採集に奔走し、また県立図書館・市民図書館・高知新聞社その他各方面の協力を待たなければならなかった。その便宜と機会を与えられた方々に対し改めて感謝の意をささげたい。

一 本文は当用漢字と新かなづかいによることを原則としたが、引用文は原文にしたがうことにとめた。また本書に掲げた事項はその主要なものを選び、細事については可能な限り巻末年表に詳記することにした。記述の遺漏については他日の補訂に待ち、大方の垂教を期待するものである。

目次

序文	
凡例	
序章 近代日本の展望	一
第一章 高知県の成立と県情一般	三
第一節 明治維新と山内氏	三
第二節 県政事始め	五
第三節 新政への抵抗	八
第四節 行政区画及び阿波国管轄	一五
第五節 地租改正と永小作権問題	六四
第六節 高知県会開設	六九
第七節 官公庁の諸施設	七四
第八節 教育行政とその実情	七九
第九節 陸路と海路	八九

第十節 人口と社会……………九二

第二章 県政初期と立志社……………九六

第一節 近衛解兵と県下の動揺……………九六

第二節 立志社創立……………一〇一

第三節 民会とその発展……………一〇五

第四節 寸志兵計画……………一〇〇

第五節 大阪会議と愛国社……………一一二

第六節 谷干城の諫告書……………一一六

第七節 拳兵派と建白派……………一二〇

第八節 立志社の獄……………一二五

第九節 中立社とその動静……………一三四

第十節 士族授産事業……………一四一

第三章 民権派の活動……………一四七

第一節 各社と言論戦……………一四七

第二節 愛国社の再興……………一五〇

第三節 国会期成同盟……………一五三

第四節 立志社と憲法私案……………一五九

第五節 共行社の分離……………一六三

第六節 海南共同会……………一六七

第七節 県政と民権派……………一六九

第八節 田辺県令と四国新道開鑿……………一七四

第四章 自由党の軌跡……………一八二

第一節 自由党結成せらる……………一八一

第二節 板垣の遭難と外遊……………一八六

第三節 自由党の解散……………一九一

第四節 基督教主義……………一九五

第五節 三大事件と建白運動……………一九九

第六節 保安条例と石川島監獄……………二〇五

第七節 大同団結始末……………二一〇

第五章 国会と政党……………二二三

第一節 国会開設と第一議會……………二二三

第二節 選挙干渉始末……………二二九

第三節	日清戦争と国会	二四二
第四節	自由党と進歩党	二四六
第五節	憲政党内閣	二五一
第六節	自由党の末路	二五七
第七節	政党の系譜	二六一
第六章	経済と社会	二六七
第一節	経済界と高知商業会議所	二六七
第二節	県営水力電気事業	二七六
第三節	電話開設とその普及	二八五
第四節	漁業と漁民問題	二九三
第五節	開拓移住と海外移民	三〇三
第六節	県下経済状況調査	三三四
第七章	戦争と政治	三五四
第一節	日清戦争と高知県経済	三五四
第二節	歩兵第四十四聯隊創設	三五八

第三節	海南倶楽部	三六三
第四節	日露戦争と県民大会	三六八
第五節	板垣退助と社会改良会	三七四
第六節	土佐倶楽部と県内政情	三七九
第七節	明治の終末	三八六

第八章	大正期の政治と社会	三九〇
第一節	大正の政変	三九〇
第二節	世界大戦とシベリア出兵	三九六
第三節	県経済界の展望	四〇一
第四節	米騒動と農村問題	四一六
第五節	政党と県政	四二七

第九章	昭和初期の政治と社会	四三五
第一節	普通選挙実施せらる	四三五
第二節	浜口内閣と民政党	四四二
第三節	動揺する社会	四四六

第四節	県教育是と学生運動……………	四六二
第五節	テロリズムの時代……………	四七一
第六節	満州問題と県民大会……………	四七五
第七節	満州開拓移民……………	四八一

第十章 非常時と統制経済……………

第一節	大陸政策と国内政変……………	四八八
第二節	朝倉聯隊の出征……………	四九二
第三節	国策と県行政……………	四九五
第四節	国鉄土讃線全通す……………	五〇〇
第五節	四国配電会社設立……………	五〇八
第六節	高知港とその開港……………	五一七
第七節	関西汽船株式会社……………	五二七

第十一章 太平洋戦争と高知県……………

第一節	東条政権と翼賛政治会……………	五三〇
第二節	郷土部隊の戦歴……………	五三九

第三節	戦時下の県政と経済……………	五四一
第四節	食糧増産と土佐農兵隊……………	五五三
第五節	本土防衛と郷土部隊……………	五五八
第六節	大日本政治会高知支部……………	五六五
第七節	地方総監府と国民義勇隊……………	五六八
第八節	空襲の記録……………	五七一
第九節	終戦と県政……………	五七九

第十二章 民主日本の誕生……………

第一節	新憲法と高知県……………	五八四
第二節	南海大震災……………	五八九
第三節	復旧と経済再建……………	五九五
第四節	農地改革……………	六〇一
第五節	高知大学と女子大学……………	六〇八
第六節	高知空港……………	六一四
第七節	市町村合併……………	六一七

第八節 四国総合開発への道……………六六

第十三章 近代文化と社会……………六三

第一節 生活と産業……………六三

第二節 宗 教……………六三

第三節 社会 事業……………六六

第四節 同 和 問 題……………六〇

第五節 学 校 教 育……………六〇

第六節 文 化 施 設……………六三

第七節 婦 人 運 動……………六四

第八節 観光と文化財……………七〇

歴代知事一覧表……………六九

年 表……………七一

あとがき……………七〇

索 引……………

序 章 近代日本の展望

明治・大正・昭和の三代をつらぬいて現代につながる一世紀の大部分を、われわれは近代と呼んでいる。過去三世紀にわたる幕藩体制から脱皮した日本が、明治維新を機として残存するその封建性を克服しながら近代化を成就するためにいかに苦悩し、いかに努力したか。欧米先進諸国に追いつき追いこすために富国強兵、文明開化を呼号して血みどろの努力を続け、東洋の覇者と認められるまでにその国際的地位を押し上げた明治の日本であった。第一次世界大戦には連合軍に協力してベルサイユ講和会議に臨み、輝かしき戦勝国としてアメリカ・イギリス・フランス・イタリアと肩をならべて世界五大強国の座を占めた大正の日本であった。極東の海に浮かぶさゞやかな島で形成された「ミカドの国」日本が、このような速度をもって有力な国際的地位を獲得したことは世界史のなかの驚異とさえ評価されたのであるが、その発展をささえた富国強兵の国策は資本主義、軍国主義に偏向して、やがて弊害を見せはじめた。藩閥から財閥、さらに軍閥に移転してゆく権力政治は年をおうて国民生活の不安をまねき、満州事変から日華事変、さらに太平洋戦争に突入した軍閥の暴走は、ついに第二次世界大戦にまきこまれて無条件降伏を余儀なくされた。敗戦を機会に、日本は占領軍によってその武装を解除され、財閥を解体されて民主国家として再出発することになった。これが昭和の日本である。